

第十八章

紀 行

——エグザイルの帰郷——

バウア・ポストマス



南イタリア地図

第一節 光がやく古典文学の世界

ギッシングが死んだ一九〇三年、イギリス系アイルランド人の小説家ジョージ・ムア^①は「帰郷」という短篇小説を書いた。その作品は同じ年に『耕されぬ畑』に収められて再版されたが、登場人物の一人はギッシングが聞いたなら間違いなく喜んで同意したと思われる心情を述べている。

イタリアには、他のすべての国にある美しいものを全部あわせたよりも、さらに多くの美しいものがある。イタリア以上に美しいところはどこにもない。

古典の国と古典の言語に対するギッシングの愛は、生まれ故郷のウエイクフィールドにあったバック・レーン校で、ギリシャ語とラテン語の基礎を学んでいた幼年時代にまでさかのぼる。彼はジョゼフ・ハリソン師の学校に一八六五年から父親が死ぬ七〇年まで在籍したが、一八六九年には十歳の少年ながらすでにラテン語に精通しており、ウエルギリウス^④（図①）の『牧歌』（紀元前四二―三九年）の第一部を英詩に翻訳することまで試みていた^③。その翻訳は現存するギッシングの文学習作の中でも最も初期のものである。しかも、その詩における流謫^⑤（*exile*）の恐怖というテーマは、興味深いことに、小説家ギッシングに生



図① 古代ローマ最大の詩人
ウエルギリウス

涯を通してつきまとった追放、亡命、異郷生活というモチーフを予見するものであった。

エグザイルは、強制されたものであれ、自らに課したものであれ、ギッシングの人格形成にもっとも重要な影響を及ぼした体験として見なすことができる。やがてギッシングは作品中でエグザイルを人間の状況を表す、自然な、洞察に満ちた隠喩^⑥に転化することになる。父親の突然の死は若きギッシングにとって、家庭があるという感覚と、彼が心から愛して生涯忘れることのなかった父親によって与えられてきた安全と励ましとを定期的に打ち砕くものであった。一八七六年に友人から金を盗んだためにオーエンズ・カレッジを退学させられ、そのあと渡ったアメリカでの生活は、追放者としての彼の体験を強めたに違いない。ギッシングが父親の死後に送った生活は、（それまで彼を奮い立たせてくれた父親の存在と密接に結びついていた）自分自

身に対する自信と目的意識を再び取り戻すための不断の試みだったと言える。そして、二度と取り戻すことのできない父の愛を失ったという傷を癒すために、彼はさまざまな方法を試みたが、その中では、偉大な古典作家の作品を読むことによって、薄暗く悲しいウエイクフィールドから太陽の輝くイタリアやギリシャの世界へ逃避することが、最も効果的かつ興奮を伴うものであった。この点に関して、ギッシングは『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年）の中で同じことを指摘し、明らかに自分の代弁者と思われるライクロフトに次のように語らせている。

私は記憶を操作することによって、少年時代における古典の勉強をいつでも暖かい光かがやく日々の印象に結びつけることができた。もちろん曇りや雨の日の方がはるかに多かったに違いない。しかし、そういう暗い日々は思い出さずにすんだのである。
〔夏〕第九章

第二節 憧れの故郷、イタリア

古い世界がもっている主な魅力が二つあるとすれば、それは古い世界が忘れられず持続すること、そして人を魅了して癒すことである。逆説的に聞こえるかもしれないが、古い世界はとつくの昔に過ぎ去って死に絶えているために、かえって時間と

運命の攻撃を寄せつけない。古い世界は、このようにはつきりと時間の破壊力に対して勝利宣言しているために、断絶と孤独の感覚に対する完璧な解毒剤になりうるのである。人生を豊かにしてくれる、過去の世界の場所と出来事がもつ言葉の響きと面影に、ギッシング以上に影響を受けた作家はいないであろう。

言葉によるものであれ、造形美術であれ、建築であれ、古典の世界から生き延びてきたものもがもつ永続的な生命力は、死に完全に打ち勝っているように思われる。しかし、死に対するギッシングの態度には、もう一つ別の側面がある。ギッシングによる死の捉えかたには、常に彼ならではの曖昧さがあるのだ。もし死が人間の希望を打ち砕くがゆえに恐れられ、対決すべき破壊者として見なされるならば、死は同時に古典の世界に理想的な形で存在する平穏と不変性を約束してくれるために、人を引き込まずにはおかない魅力をもつであろう。

死に対するギッシングの曖昧な態度は、少年時代に彼が夢見た国、つまりイタリアの古い歴史と文化に対する彼自身の同じ画面的な態度にも反映されている。おそらくまだオーエンズ・カレッジに在籍していた一八七六年に書かれたと思われる詩の中で、ギッシングはイタリアへの愛を高らかに謳っている^⑤。その愛を語る言葉は、ギッシング特有の独創的な言葉であり、その後の彼の人生においても本質的な変化は見られない。

イタリヤ

夕暮れの最後の光がゆっくりと

私の書斎の壁から消えたとき、

夜の風が侘びしい音をたてながら、

周囲の庭木の葉の間でそよいだとき、

私の思いがとりとめのない夢の中でかきたてられ、

目に見えているものの真の姿を忘れるとき、

ああ、約束の地、イタリヤよ、

私の魂は汝に憧れる。

汝の深い青空のためではなく、

汝の国の乙女たちの目に輝く愛の光のためではなく、

あるいは汝が示してくれる

ラファエロとミケランジェロの栄光のためでさえない。

もっと悲しげで、もっと高貴な人が、

私のためにイタリヤの名前を神聖なものとし、

そのローマ人の書物の中に存続する

過ぎ去った時代を追い求めよと私に命じる。

少年時代に猛勉強した嫌な思いも、

公開大広場の群衆の頭上で響き渡る

堂々と韻を踏む

言葉の調和を乱すことはできない。

記憶の中では、苦勞して進んだ道が

祭日の光の中で輝いている。

故郷を憧れる追放者の心のように、

私の心もローマの名前を聞いて高鳴る。

七丘の都市の物語を前にして、妖精物語が

なんと早く色あせてしまったことか。

アルバの敗走とカンナエでの不安を聞いて、

若き血潮がどんなに煮えたぎったことか。

邪мана闘いに対する最初の償いとして

護民官が殺されたときの恐怖たるや！

聖なる道の長い勝利者の列に加わることは、

どんなに誇らしいことか。

さらに私が成長し、

二人の詩人と善良なマエケナスとの対話を知り、

ユリアヌスの宮殿を神聖化した詩を読むことは、

どんなに嬉しいことだったことか。

さらに素晴らしい体験は、ホラティウスの詩に没頭し、

混み合った街路の喧騒と暑さから逃げ出し、

サビニの農園の夕べの美しさを堪能したことだった。



図② ラテン文学黄金期の詩人
ホラティウス

ここで重要なのは、ギッシングがイタリアの「約束された地」に憧れたのは、ルネッサンス芸術の栄光のためではなく、またイタリアの風景や空の甘美さのためでもなく、彼が獲得しようとして必死に努めたウエルギリウスやホラティウス(図②)の「堂々と韻を踏む」言葉によって伝えられる——そうした古代ローマの歴史と文明がもつ魅力のためだったということである。ギッシングは長い間の「憧れの」故郷、イタリアにとうとう帰還したとき、すなわち一八八八年に初めてイタリアを訪れるより十二年ほど前に、すでにイギリスでの生活は追放者としての生活であると定義していた。しかし、詩の中で想像されたイタリアの甘美な生活は、魔法をかけられた隠遁生活というイメージに結実しているように見え、そのイメージには安らかで穏やかな死に身を任せる(「暑さから逃げ出す」という強い暗示がある。さらに若いときの詩(もしかするとすでに一八六九年に書かれて

いたかもしれない)「亡命者」で、自分が愛したカラブリア⁽¹⁷⁾を舞台にしたメロドラマとして、ギッシングはエグザイルのテーマを活かそうと試みている。「法に背いて追放されることになった」男が、「人の住まない侘びしい島を住処にする。その島は深い、波打つ海の中にあり、その海はイタリア南部の海岸に押し寄せる」⁽¹⁸⁾。恩赦の知らせを待つて六年間ほど侘びしい生活を続けた後、とうとうその恩赦の知らせをもった男がやって来て、人が住む世界に戻ってもよいことになる。追放者はその朗報を記した手紙に目を落とすと、とうとう来たと叫び、よろめき、倒れて死ぬ。この「亡命者」という詩は、どう見ても初心者の域を出る作品ではないが、物語から悪い予感を伴って現れてくるのは、追放者の行き着く唯一の場所は死だという絶望的な確信である。

しかし、ギッシングは最初のイタリア旅行直前の一八八八年秋の手紙で、目前に近づいたイタリア旅行を実現しつつある夢として何度も語っている。例えば、ドイツ人の友人であるエドゥアルト・ベルツ宛ての手紙で、彼は次のように書いている。

しかし、イタリア、イタリアなのだ。とうとうイタリアへ本堂に行こうとしている、このことを考えてみてくれ。夢にも思わなかったことだ。今月の終わりには、僕はマルセイユへ行くだろう。そして、そこから船に乗ってナポリへ。この旅行に対する僕の期待を言葉で表すなんて不可能だ。(Letters 3: 258)

同じ頃、弟アルジェノンには次のような手紙を出している。

しかし、そんなことは僕の目の前に広がっているものに比べたら、取るに足らないことだ。イタリアが僕を若くしてくれるだろう。イタリアでは、僕がいつも取り逃がしてきたものを見つけることが、つまり人生の喜びを直に味わうことができると思う。ちょっと想像してみてくれ。「一八八八年」十月二十九日の夜明け、船のデッキから外を眺めてみる。すると目の前にヴェズヴィオ火山^②の頂が。信じられない、そんな時が本当にやってきたなんて、今でも信じられない。

(Letters 3: 208)

これらの文章からはつきりとわかるのは、イタリアへの帰郷^①が今まきに行われることを、この追放者が期待しているということである。しかし、彼は同伴者のプリット^③がしばしば自分をいらいだたせ、長年待ち望んだ夢の実現に水をさすだろうとは予想できなかった。ギッシングは、自分のような追放者が新たな社会に本当に迎え入れられるためには、過去の責任と関わりを引きずったままではいけない、ということをやイタリアに来てようやく理解した。ゆえに、九年後に再びイタリアに戻ってくるときは、単独で旅行しようとしたのであった。

『イオニア海のほとり』(一九〇一年)に描かれている、一八九七年から九八年にかけての二度目の長期的な「イタリアとい

う約束の地」への旅は、『ヴェラニルダ』(一九〇四年)というイタリアを舞台にした歴史小説の題材を集めるという目的があったにせよ、ギッシングの作家としての職業的な関心というよりは彼の個人的な動機、彼の存在に関わる動機に促されてなされたものだった。つまり、それはギッシングに生涯つきまとった追放者の運命を克服する最後の試みだったのだ。一八八八年二月、最初の妻ネルが死んだとき、その死がギッシングを解放し、新たな人生の扉を開くことを可能にした。だが、今回の場合、結婚生活に伴う不満や失望ときっぱり縁を切ることができたのは、二番目の妻イーデイスのもとには決して戻るまいという彼自身の強い決意があつたからだ。おそらく、イタリア旅行は二回とも、彼の気分を滅入らせるような、自分ではどうしようもない状況から逃げ出すためであつた。そんな状況のため、今度こそは単身で、太陽が輝く夢の国イタリアへ逃げ出したいという衝動に抵抗できなかったのである。

第三節 イタリアにおけるギッシング

シエナ^④で注目すべきディケンズ研究を完成させると、ギッシングは南へ向かい、途中ローマを通じてナポリへ行つた。そして一八九七年十一月十六日にナポリからカラブリアに向かつて旅行を開始した。ギッシングが『イオニア海のほとり』で書いたのは、十二月十二日までのほぼ四週間にわたる期間の出来事

だった。この作品は独創的な旅行記であり、他のどの作品よりも、理想とする世界に身を置くギッシング自身の姿を伝えてくれる。八年前の一八八九年十一月、ギッシングはギリシャに行く途中の船から、長い間カラブリアの荒涼とした丘を眺めていた。そして彼は日の出の太陽が、この荒涼とした地域に、そして人が住まない山々と深い谷の上に、素晴らしい魔法をかけるのを見た。自分を卑劣に扱ってきた近代社会に背を向けることで、自分自身と折り合いを付けるときがとうとうやってきたのだ。カラブリアの旅行がギッシングにもたらした大きな影響を理解するためには、『イオニア海のほとり』の最後の段落における彼自身の告白を見ればよい。彼は自分自身について、常に陰鬱な危機的状況に脅されて「思いどおりの人生を過すことのできない人間」(第十七章)と捉えている。この旅行でギッシングは魅力的な風景に、古代ローマの印象的な遺跡に、そしてその土地の人々の歓迎と親切に無条件に自分自身を委ねた。彼は自分の人生を自分の思うようにできないと晩年まで思い続けてきたが、この旅行の間だけは少年時代から彼を虜にしたカラブリアの世界の甘美な魅力によって自分を癒すことができたのである。

一人称で書かれている『イオニア海のほとり』はギッシングの紀行文である。ナポリから出航し、パオラ²³に上陸し、カラブリアの丘陵を越えて、コゼンツァ²⁴に向かう。そこから鉄道でタラント²⁵へ。南へ旅を続け、メタポント²⁶を通ってコトロネ²⁷へ。

コトロネで深刻な病に襲われて一週間ほど寝たきりになり、リカルド・スクルコ医師²⁸の治療を受ける。病氣から回復すると、生まれ変わったかのように「疾風の山地」と呼ばれるカタンツァーロ²⁹に行き、そこでコロオラーノ・パパラッツォ³⁰が経営するホテル・セントラレー³¹に滞在する。馬車でレッジヨ³²に行く途中、スクイラーチエ³³に立ち寄り、そこまでの道中は雨にたたられた。それから列車に乗り、メッシーナ海峡³⁴に行くまでの最後の七時間の旅をした。

ギッシングはイタリア旅行するのに必要な知識を最も多く備えていた旅人と言える。彼はきわめて語学に堪能で、英語の他に独学で学んだフランス語、ドイツ語、イタリア語を話し、それに加えて二つの古典語、すなわちギリシャ語とラテン語を完全にマスターしていた。最初は方言を理解するのに苦労することがあったにせよ、旅行する先々の人々とのコミュニケーションにまったく苦労しなかったようだ。彼は熟練した旅行者であつたため、どんな状況になつても、また同伴する人々が何を要求しても、容易に対応できた。貧しい人々や虐げられた人々への共感³⁵は『イオニア海のほとり』の多くの文章に現れている。そのような文章の中で、彼は長い年月の間、彼らが苦しんでいたことについて、次のように思いを馳せている。

幾世紀にもわたる征服と隷属とがイタリア人に与えられた運命だった。どこの土地でも血で浸されたことがあるのだ。……無

念と疲弊に満ちた国なのである。……ここにやって来たのは、この土地と人々を愛したからではなかったか。(第十章)

『イオニア海のほとり』は、古い世界の記憶と、その世界の文学に関する連想と、現在の社会に対する鋭い観察とを独特の形で織り交ぜて提供してくれる。土地に対するギッシングの興味は、その土地が古典の世界と結びつけられなければ、失われた。このことは、ギッシングがカタンツァーロの数少ない古い建築物——例えばロベール・ギスカル³⁴によって十一世紀に建てられた城——の情景を思い起こそうとしている文章にはつきりと示されている。これはローマ時代の遺跡と比べれば新しい建造物であるが、ギッシングがカタンツァーロを訪れる少し前に解体されていた。ギッシングはカタンツァーロの章でそれについて言及しないではいられなかった。それは、ギッシングの想像力が「対象の実際の姿ではなくて、対象の想像されうる姿」³⁵によってかき立てられることを示す好例である。

コゼンツァにおいても、もはや存在しないアラリック³⁶の墓を訪れたことが契機となり、古典や同時代の文学からの影響を色濃く示す長い記述が生まれている。その記述は、エドワード・ギボンが『ローマ帝国衰亡史』(一七七六―八八年)³⁷で描いたアラリックに魅了された若い頃のギッシングの姿を示すだけでなく、彼を失望させる今の現実と彼の詩的想像力が作り出した過去の情景とを対比していて、そういう成熟した彼自身の姿を示

すものにもなっている。同様に、ラキニア岬にあるヘラの神殿³⁸の中で唯一残っている柱(図③)を訪れることについて、病氣のために「残念ながら見合わせなければならなかったこと」(第九章)は、かえって彼の想像力が描き出した柱の力強さと真迫性を強めることになった。本質的にギッシングの想像力は存在しないものを求める想像力である。つまり、彼の精神が断片と不完全をあまりにも恐れるために、想像力がその精神の要求に応える形で、想像上の完全な姿を作りあげるのである。

『イオニア海のほとり』には、こうしたギッシングの想像力とその機能をよく示していると思われる二つの有名な文章がある。その一つは第一章の最後にあり、叙情的である点では、彼の作品の中でも並ぶものはない。

船尾の近くに坐っている私からは、人の姿が全く見えない。こ



図③ ラキニア岬にあるヘラの神殿の廃墟

魔法の海の沈黙の中をたった一人で渡っているかのようだ。沈黙はすべてを包み込み、汽船のエンジンの音さえ私の耳には届かず、水しぶきの音と混じり合って眠気を誘う。死の世界の静寂が生きるものすべてを金縛りにかけている。現在は現実でなくなり、はかない無となる。現実にあるものはといえば、私の周囲のすべてに意味を与え、夜に無限の哀愁の色を帯びさせている、埋もれた遠い過去のみ。なによりも嬉しいことに、自分の存在さえ意識に感じられなくなった。精神が知覚するのは造り出した幻想の形のみで、それを見つめている間は安らかでいられるのだ。

(第一章)

もう一つは最終章の終わりにある。

あたりは静まりかえり、私一人で波の打ち寄せる音を聞いていた。雲の冠をかぶったエトナ火山⁽³⁾に夕闇が落ちかかり、ちかちか光る明かりがスキュラとカリブデイス⁽⁴⁾あたりから見えて来る。最後にイオニア海の方を眺めやるとき、現在と現在の騒音をすべて忘れ、古代世界の静寂の中をいつまでもさまよい歩く運命に生まれればよかったのに、と願わずにはいられなかった。

(第十八章)

両方の文章で孤独な存在としての人間とイメージを作り出す想像力とに強調が置かれているのは重要である。その想像力とは、

死んだものを生きた姿として甦らせ、くだらない場違いな近代世界を打ち消し、その代わりとして、想像力が作った静かで平穏な世界と置き換える能力である。あるいは、本稿の中心的メタファーである「エグザイル」に関連させて言い換えれば、この文章は、追放の運命が克服されるとき、新しい帰属意識が育まれるとき、そして帰郷が達成されるときを描いている。しかし、一読して受ける印象よりは、この達成は曖昧なものに思われる。というのも、次の疑問に答えを出すのは難しいからだ。これらの帰属のイメージや新たに見出された目的は、生に関わるものなのか、それとも死に関わるものなのか、という疑問である。

次は三番目の文章であるが、効果的にこの旅行記の中心、第九章の真ん中に置かれている。それは、ギッシングがコトロネでマラリアに苦しんでいたとき、彼の精神が作り出した幻想的なイメージに関するものである。ギッシングがこのときほど死に近づいたことはなかったが、高熱による陰鬱な発作は、恍惚を伴う幸福感をもたらした。それは短い時間であったが、彼の精神が健全なときには体験したことがないものだった。彼が見た幻想は、素晴らしい、堂々とした、美しい古代の生活が極めて詳細に描き出された光景である。純白の光がそれぞれの場面を照らし出している。ギッシングはこの体験について、「たった一時間ほどであったが、私の想像力にとって非常に大切な源だった古代生活を垣間見ることが許されたのだ」(第九章)と要

約している。短い時間、死に絶えた世界が再生したのである。ここから読み取れるのは、ギッシングが幻想の世界で完成者としての死と出会うことにより、破壊者としての死のもとに自分を追いやる悪魔たちに、短い時間だったとはいえ勝利したということである。

第四節 想像の世界と現実の世界

いずれにせよ、それらの前兆はよいものではなかった。ギッシングはシエナで宿屋の女主人の夫の死に立ち会っていたし、ひどい咳に苦しめられ、「ハンカチに明らかに結核とわかる咯血をし」(Dunbar, 186)、ますます寄る年波を感じていた。ローマからアメリカの友人マーサ・バーンズに宛てた手紙には、「とても年をとったように感じる」(Dunbar, 6:377)と書いている。また、二人の息子から離れてしまい、悲しいが父親失格であると感じていたはずである。自分は死ぬためにイタリアに来たのだという意識が彼にはあったと言ってもよい。こうした思いが、コトローネで熱にうなされて寝たきりになっていたときに、少なくとも彼の頭をよぎったに違いない。しかしながら、この追放者は死と契約を結んでしまったわけではなかった。最初の現世的な意味でのイタリアへの帰郷の後に、より深い所で行われた、精神的な意味でのイタリアへの帰郷が、熱病による夢の中で達成されたのだった。そして、その達成によってギッシングは想

像力の価値を再認識し、自分の創造の源泉がどこにあるかを確信することになったのだ。その創造の源泉とはローマ文明の歴史と言語であった。カラブリアで過ごした四週間の中で、はかなくて短いものであったとはいえ、ギッシングが追放者としての自分の運命を終わらせ、帰郷を最も深く体験できたのは、ホテル・コンコルディアにおける病気の一週間だったと言えるかもしれない。

コトローネでの危機の後、ギッシングにとって、日常生活における人々との出会いは、土着的なイタリア人の召使との接触でさえ、より大きな楽しみとなり、彼の観察力も増したようだった。ギッシングのカタンツァーロへの到着は——それが日暮時だったのは意味深い——彼の帰郷のもう一つの祝福すべき瞬間であり、その情景はヘスペリデスの異国風の庭園のようであった。ギッシングは食欲を取り戻し、かの有名なカタンツァーロの人々の手厚い歓迎は、いっそう彼の心をなごませた。ギッシングはカタンツァーロの人々の会話能力を賞賛して次のように述べている。

彼らの会話能力はイギリスの地方に住む人々のそれよりも、遙かに程度が高い。……この民族は生まれながらにして、理知的なものに敬意を抱いている。(第十三章)

ギッシング自身の理知的なものに対する尊敬は、さまざまな古

今の作家たちの説明におそらく最もはつきりと示されているだろう。その作家たちの作品は、ギッシングの紀行文の構造と内容にはつきりと影響を与えている。ホラティウスやウェルギリウスの詩、カッシオドールスの『諸文書集成』（五三七年）、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』、ルノルマンの『大ギリシャ』（一八八一年）。こうした作品は長い間ギッシングが崇拜し、愛してきたものだ。示唆的な表現に富み、後世に残る作品をギッシングが書くことができたのは、これらの作品を横断的に巧妙に織り交ぜることができたからである。とりわけ印象的なのは、まだ彼が少年であったときに知った歴史上の人物に対する不変の評価と賞賛である。その良い例は第十六章において彼の最も古くからのヒーロー、テオドリクス⁽⁴⁾（図④）を駆け足で説明した部分ではなからうか。その部分は、ギッシングがまだマンチェスターの学生だった一八七三年に書き、賞をとった「ラヴェンナ」という詩において、東ゴート族について書いている箇所とほとんど変わっていない。⁽⁵⁾しかしながら、そのような例から次のことがはつきりとわかる。ギッシングが安らぎを得られると思ひ、また実際に安らぎを得ることができる書物の世界を創造できたのは、子供の頃からの古典の世界への憧れを意識的に永続させてきたからである。

ギッシングはイタリアの現実の世界においても安らぎを感じることができた。南イタリアにいかにも床屋が多いかを示す無数の洗面器、メタポントの空を旋回して鳴くタゲリ、耕作に従事



図④ 東ゴート族の王(454-526)、
テオドリクス

する白い牛、違うテーブルに座っているが互いに怒鳴りあう白髪交じりの役人たち、死者について知人と別れて旅に出る人のように記したコトローネの墓地にある貴族の墓銘碑、コトローネの洗濯女たちの「全部むきだしの足」(第八章)。そうした些細なものを見つけて、どれほどギッシングは喜んだことか。ハーディの言葉を借りるなら、「彼はそんな取るに足らないものによく注目する人だった」⁽⁶⁾のである。ギッシングは、そのように非常に詳細な描写を全体の記述の中に巧妙に配置することで、過去の歴史への言及や書物からの情報と、近代社会についての鋭く説得力のある観察とを魅力的な形で結びつけている。

移動するときのギッシングは情報収集の機会を決して逃さなかったようである。⁽⁷⁾彼にとって場所を変えることや国を移動することは、多くの場合、想像の泉を湧きあがらせることにつながった。カラブリアの旅行を終えた直後に、ローマからクレア

ラ・コレットに宛てた手紙で、「ちよつとした、きわめて短い作品のために十分な材料を集めてみました。そのうちにわかりますよ」(Leters 7: 15)と語ったギッシングは、実際に最初のイタリア訪問を終えてイギリスに帰国するとすぐ、その体験を『因襲にとらわれない人々』(一八九〇年)という作品に活用している。ギッシングはその作品の執筆を一八八九年六月末まで開始しなかったが、同年八月九日にはイタリア北部のトレントで完成させた。このようにギッシングが作家の仕事に集中したことから、追放者のつらい生活といえども天命の仕事には影響させないぞ、という彼の強い意識がはっきりと感じ取れる。

この「ちよつとした、きわめて短い作品」の作者、イタリアで自由に羽を伸ばした謙虚なギッシングは、過去百年に現れた紀行文の中で最も優れた一つを書いた作家として褒め称えることができるだろう。

訳註

(1) ジョイスや芥川龍之介などに影響を与えたアイルランドの小説家。青年時代をバリの芸術家たちの間で過ごし、特にゾラの影響を受け、イギリスにおける自然主義を代表した。イエイツと交わり、一時期アイルランド文芸復興運動に参加した。イギリス自然主義の代表作『エスター・ウォータース』(一八九四年)と自伝的小説の『青年の告白』(一八八八年)が有名。

(2) George Moore, "The Way Back," *The Unfilled Field*, introd. Richard Allen Cave (Gerrards Cross, Buckinghamshire: Colin Smythe, 2000)

「二二五」『耕されぬ畑』はムアがツルゲーネフの『獵人日記』(一八五二年)をモデルにして書いた短篇集で、一九〇二年に六篇を収録したアイルランド語版、翌年に「帰郷」を含む十三篇の英語版が出た。「帰郷」はイタリア文化に憧れる彫刻家ジョン・ロドニーと彼の友人ハーディングの対話を中心となっている物語。引用されている「イタリアほど美しいところはない」という言葉はロドニーの言葉である。一方、ハーディングはパリに行く計画をやめて、生まれ故郷のアイルランドに帰り、「ケルト文芸復興」を始めるという。同じアイルランド生まれだが、イタリア文化を賛美するロドニーにとって、アイルランドは文化不毛の地であり、ハーディングの計画は愚かなものと思えなかった。しかし、理由は判然としないが、ハーディングはアイルランドに強く引かれていてと主張する。小説の題名「帰郷」はハーディングが生まれ故郷のアイルランドに帰ることを意味している。

(3) ウェストゲイト通りの北側に平行して走るバック・レーンにあった学校。

(4) ローマのアウグストゥス時代の詩人。「牧歌」、「農耕詩」、「アエネイス」という三つの叙事詩を残した。「牧歌」はウエルギリウスの第一作で、十篇の詩からなり、すべて百行前後、六音歩詩で書かれた羊飼いの歌である。シユラクサイ「シラクサ」の詩人テオクリトスの「牧歌」の影響を受けている。その影響のため、背景はシチリアになっているが、実際には年中変わることのない、明朗なイタリアにおける昼下りの理想化された風景が描かれている。当時の政治家マエケナスと知り合い、その推挙を受けてアウグストゥスにも接近する機会を得た。無名であったホラティウスをマエケナスに

紹介した。

- (5) George Gissing, "Translation of the First of Virgil's Pastorals" in *The Poetry of George Gissing*, ed. Bouwe Postmus (Lewiston: Edwin Mellen, 1995) 48.

- (6) George Gissing, "Italia," *The Poetry of George Gissing*, 131-32.

- (7) ラファエロはイタリアの画家・建築家で、ルネサンスの巨匠の一人。一五〇八年以後ローマで活躍し、バチカン宮殿の壁画装飾、サン・ピエトロ大聖堂の設計にあたった。ミケランジェロはルネサンスの総合的天才の典型で、彫刻では「ダビデ」を、絵画ではシステナ礼拝堂の天井画や「最後の審判」などの大作を残した。

- (8) ローマの市街中心部からテヴェレ川の東に位置する古代ローマの七つの丘のこと。古代ローマはこの七つの丘およびその周辺に建設されていた。

- (9) アルバ・ロンガは、ローマ建国神話では、アエネイスの息子アスカニウス（ユルス）がイタリアに建設した都市。ローマの三代目の王トゥッルス・ホステイリウスがアルバ・ロンガに戦争を仕掛け、アルバの王ガイウス・クలుウィリウスが死んだ後、メッティウス・フエティウスがアルバ軍を指揮した。その後、有名なホラティウス三兄弟とクリアティウス三兄弟による決闘が行なわれ、ローマ側が勝利して、アルバはローマに従った。メッティウスはやがて裏切りを画策した末処刑され、ホステイリウスによってアルバは破壊され、住民はすべてローマのカエリウス丘（ローマの七丘のひとつ）に移された。

- (10) イタリア半島南東部のアブリア地方（現ブッリャ州）、アウフイドゥス川（現オフアント川）沿いにあった村、およびその周辺

のこと。第二次ポエニ戦争中の紀元前二一六年八月二日、ハンニバル率いるカルタゴ軍とローマ軍がここで戦った。

- (11) テイベリウス・センプローニウス・グラックスのこと。同じく護民官である弟ガイウス・センプローニウス・グラックスとともに、ローマの富裕層だけが土地を所有し、農民が土地を所有できない問題を解決しようとした。改革に反対する富裕層は護民官マルクス・オクタウィウスを抱きこんで抵抗したので、テイベリウスは民衆投票によってオクタウィウスを罷免した。これは本来神聖不可侵である護民官を民衆投票で罷免させるという強引な手法であった。後にテイベリウスは土地改革反対派に殺された（紀元前一三三年）。

- (12) ホラティウスとウェルギリウスのこと。

- (13) ローマ・アウグストゥス時代の政治家。文学・芸術の保護者としてホラティウスやウェルギリウスを後援した。彼はアウグストゥスの新政体を賛美するために文学者たちの協力を得ようと腐心していた。

- (14) 古代ローマ帝国の皇帝（在位三六一〜六三年）。ギリシャ哲学に関心をもち、当時主流になりつつあったキリスト教に抗して、伝統的多神教（異教）を保護した。キリスト教徒からは背教者と呼ばれた。

- (15) ローマ・アウグストゥス時代のラテン文学黄金期の詩人で、ウェルギリウスとならんで評価される。「諷刺詩」、「詩集」、「エポードス」などの著作がある。書簡詩「詩について」はアリストテレスの「詩学」とならんで、古典主義詩論で重要視された。マエケナス、アウグストゥスの寵愛を受けたが、マエケナスに彼を紹介した

のはウエルギリウスである。

- (16) 田舎の住まいのこと。ティヴォリ（ローマの東方にある町でローマ時代の別荘の遺跡が残る町）の近くのホラティウスの別荘にちなんで、このように言われる。

- (17) ナポリの南、イタリア半島の「長靴の」土踏まずから先端にあたる州。行政上カタンツァーロ、コゼンツァ、レッジョ・カラブリアの三つの県を含む。州都はカタンツァーロ。

- (18) “The Refugee,” *The Poetry of George Gissing*, 88-90.

- (19) ボツダム生まれの活動的な社会主義者で、鉄血宰相ビスマルクのドイツを逃れてロンドンに亡命していた時に、知的な話し相手を求める一八七九年一月十七日の新聞広告を通してギッシングと知り合った。ギッシングがベルツに書き送った膨大な数の手紙は、彼の活動と思想を記録した貴重な資料である。

- (20) イタリア・カンパニア州にある火山。ナポリ湾沿岸、ナポリの南東に位置する。標高二二八メートル。七九年の大噴火でポンペイを埋没させたことで有名。

- (21) ギッシングに同伴したドイツ人。感受性や思いやりがなく、芸術や教養に関心がなく、イタリア旅行中、ギッシングをしばしばいじだした。

- (22) イタリア中部トスカナ地方の丘陵地に位置する都市。十二世紀から十四世紀にかけての聖堂やシエナ派の絵画など、歴史的建造物や文化財に富む。

- (23) 『イオニア海のほとり』からの引用の日本語訳は、『埋火・イオニア海のほとり』（小池滋訳、ギッシング選集第四巻、秀文インターナショナル、一九八八年）を用いた。

- (24) カラブリア州コゼンツァ県の町。イタリア半島の西側、ティレニア海に面する。

- (25) コゼンツァ県の県都、カラブリア州の町。イタリア南部カラブリア州北部を流れるクラティ川とブセント川の合流点。後出のアラリックはシチリア島占領に向かう途中、同地で死去。

- (26) ブーリア州の町、タラント県の県都。イオニア海のタラント湾北部に位置する港町。前面に大きな湾域を有し、これをマール・グランデと呼び、その入口には要塞化されたいくつかの島がある。

- (27) イオニア海に臨む「イタリアの長靴」の土踏まずの位置にある町。かつてはメタポントウムと呼ばれていた。ギリシャ人によって建設されたのが起源らしく、ギリシャ風の遺跡が多い。ピュタゴラスが紀元前六世紀にこの町にやって来て、紀元前五三二年に学校を建設した。ギッシングもメタポントの神殿を訪れ、また、メタポントのピュタゴラスについて「年老いたピュタゴラスの姿を空想しよう」と努めた。彼はここで紀元前四九七年に死んだ（といわれる）——人類を温和で理性的にしようとする努力に挫折して、失意のうちに」（第六章）と回想している。

- (28) コロンナ岬の東側に位置するイオニア海に面した町。かつてはクロトンと呼ばれていた。メタポント同様、ピュタゴラスが学校を建設したことで知られており、同時代のレスリング選手ミロの出生地としても知られる。また住人が健康であることが有名。ギッシングも、「クロトンよりも健康」という格言があるが、この町は健康によい点では天下無類だったのだ」（第六章）と述べている。

- (29) ギッシングがコトローネで熱病にかかったとき診断した医師。『イオニア海のほとり』の第九章では、「お医者さまとの交友」とい

う題がつけられている。

(30) カラブリア州の州都で、同州の中部に位置する。絹織物とビロードで有名な歴史の古い町。市の歴史的な中心部は三つの丘の上であり、イオニア海の眺めがよい。

(31) カラブリア州レッジョディカラブリア県の町。「イタリアの長靴」の爪先に位置し、シチリア島との間のメッシーナ海峡東岸に臨む港町。気候温暖。オレンジ、レモン、オリーブ、ブドウなどの栽培が盛ん。

(32) カタンツァーロの南東に位置し、スカイラーチェ湾に臨む町。カッシオドルスの生誕地。

(33) イタリア本土とシチリア島の間にある海峡。海峡の西はティレニア海、東はイオニア海である。前述のレッジョはメッシーナ海峡を挟んで、シチリア島のメッシーナ（シチリア州メッシーナ県の町で、メッシーナ県の県都）と向き合っている。同海峡は海流が強く、航行上の難所として古くから知られている。

(34) ノルマン人の征服者。兄弟ともに南イタリアに赴き、カラブリア地方を支配した。一〇五三年、教皇レオ九世の軍を破り、教皇に南イタリアのノルマン領を承認させた。さらに一〇七一年シチリアを占領し、ノルマン王国を建設した。

(35) *Gissing, "Italia,"* 131-32.

(36) 西ゴート族の王（在位三九五～四一〇年）。四〇一年に初めてイタリアに侵攻して以来、四〇三年と四〇九年にイタリアに侵攻した。四一〇年八月十四日にローマ征服。その後、シチリアからアフリカに向かおうとしてレグウム（現、レッジョディカラブリア）に到着したが、艦隊が難破。再び北に進路をとり、四一〇年コンセン

ティア（現、コゼンツァ）近くで死に、ブケントゥス（現、プセント川）に埋葬された。ギッシングはアラリックの墓について、「さて言い伝えによると、アラリックはプセント川とクラティ川の合流点のすぐ傍らに埋葬されたという」（第三章）と記述している。

(37) トラヤヌス帝治下から東ローマ帝国滅亡までの千三百余年を論述した歴史家ギボンの古典的名著。全六巻。

(38) ギリシア神話の女神で、ゼウスの妻。結婚、母性、貞節を司る。ローマ神話ではジュピターの妻ジュノー。ここで「ヘラの神殿」と呼ばれているのは、コトローネのラキニア岬にある神殿。ギッシングは、クロトン（コトローネの昔の名）の丘の上を「ピュタゴラスが散策し、当時は建てられたばかりのラキニア岬の神殿を遠くに眺めたかもしれない」（第七章）、「ラキニア岬のヘラの神殿を絵で飾るために、セウクシスもこの町にやって来た」（第六章）と記している。

(39) シチリア島の東部にある活火山。標高三三三〇メートル。ギリシア神話では、巨人ティフォンが再生したゼウスに敗れて、この山中に埋められた。またシチリア島に投げつけられたエグクラドスが寝返りを打つのが、この島の地震、噴火の原因とされている。

(40) メッシーナ海峡のイタリア本土側から突き出た岩礁。ギリシア神話によれば、ここに住む海の怪物が、通る船人を捕らえて喰ったという。カリブデイスはその対岸（シチリア島）近くにある大渦巻きで、これも航行の難所。危険な水路なので灯台が設けられた。

(41) ギッシングがイタリアに滞在していた当時は、マリアは空気の中の菌によって伝染すると考えられていた。彼自身、イタリアで流行していた熱病がマリアであり、空気によって感染すると考え

ていた(第三章)。

(42) ギッシングがオーエンズ・カレッジを退学になり、アメリカに渡ったときに知り合った女性。ギッシングは、マサチューセッツ州ウォルサムで臨時の高校教師となり、英語、フランス語、ドイツ語を教えていた。バーンズはギッシングの生徒で、彼より一歳年下だった。ギッシングが一八七七年三月に突然その学校をやめたのは、彼がネル・ハリソンに忠実であろうと決意していたものの、バーンズに次第に魅了されてしまったため、良心の呵責を感じたからである。

(43) リビア北東部、地中海のシドラ湾に臨む港湾都市、ベンガジ(Benghazi)の古代名。ギリシャ神話では、遠い西の果ての国に住む四人(七人とも言われている)の姉妹、ヘスペリスたちのこと。彼女たちは、ゼウスとヘラの結婚の際に祝いとして贈られた黄金のリングの番をし、大蛇の助けを借りてそのリングを庭で守り、他人を寄せつけなかった。

(44) ギッシングがカタンツァーロ在住のドン・バスクワレの案内で「ある店」を訪れたとき、店員が「これをお持ちになりますか」と小さな包みを作ってくれた。ギッシングは代金を払おうとしたが、店員は受け取らなかった(第十二章)。

(45) ローマの政治家、著述家、修道士。五一一年(二十歳頃)には、すでに東ゴート人の王テオドリクスの宮廷で財務官の地位についており、五三三年には執政官に就任し、五三三年から三七七年までは近衛長官を務めた。カッシオドルスはローマ人がゴート人の支配のもとで平和に暮らすイタリアを思い描いていたが、ビザンティン(東ローマ)のユスティニアヌス帝がイタリア侵略に成功したとき、

公職から退いた。以後、修道院生活に入り、宗教とギリシア古典などの文学の研究に没頭した。『諸文書集成』はカッシオドルスの著作のうち最も重要なもので、この宗教的および世俗的学問の百科全書的集成は二部に分かれ、第一部は聖書の解釈とキリスト教の優れた教父たちの生涯と作品に関するものであり、第二部は伝統的自由七学科の学習の手引きである。この著書は多くの中世の読者にとって古典自由学科への数少ない手引書の一つであった。

(46) フランスの古代史学者・考古学者。彼は一八七九年と八二年に南イタリアを旅行し、その成果を『大ギリシャ』として発表した。第一巻と第二巻が一八八一年に出たが、未完のまま著者が死んだために、遺稿が第三巻として一八八三年に刊行された。

(47) 東ゴート族の王。四六一年、ローマ人が蛮族と同盟する際の慣例として、彼は人質として東ローマ帝国のコンスタンティノープルに遣わされたが、皇帝に目をかけられ、四七一年に東ゴート族のもとに帰るまで、ローマ風の教育を受けた。四七四年に東ゴート族の王となり、イタリアを攻めて四九三年にオドアケルを破り、首都ラヴェンナを占領、イタリア全土を支配した。彼はローマ帝国で受けた教育を役立て、ゴート人とローマ人との間の溝を埋めようとした。ローマ人の社会制度を評価し、哲学者ポエティウスやカッシオドルスを登用した。

(48) "Ravenna," *The Poetry of George Gissing*, 16-26.

(49) Thomas Hardy, "Afterwards" in *The Complete Poems*, ed. James Gibson (London: Macmillan, 1976) 553.

(50) 例えば『イオニア海のはとり』第五章において、ギッシングはタラントを訪れたとき、ホラティウスの代表作『頌歌』に出てくる

「ガラエスス川」を探し当てるために、原語の発音に近い「ガレゾ川」を知る土地の人を尋ねて歩いている。

(51) ロンドン大学で経済学の学位を取った最初の女性。一八九二年三月に「ジョージ・ギッシングの小説」と題した講演をロンドンで行った。『余計者の女たち』（一八九三年）に関心を持った彼女は、翌九三年七月にギッシングと会っている。知的に優れて自立した「新しい女」としてギッシングに気に入られ、アルジェノンと共に遺言執行者に指定された。

(52) イタリア北部トリエンティノ＝アルト・アディジェ (Trentino-Alto Adige) 州の州都。アディジェ川の左岸にあり、背後を森林におおわれた山岳地帯の斜面の町。夏冬とも多くの登山家、スキー客が訪れる観光地の中心。一七〇六―九七年までフランスに統合され、ナポレオンはバイエルンにここを譲渡した。一八一四年以後はオーストリア領となり、第一次大戦後にイタリア領に戻った。

(光沢隆訳)